

第八章 新しい王

マイルズとエドワードがロンドンに到着すると、二人は路上にたくさんの人々がいるのを見ました。あらゆる建物に国旗が掲げられており、そこら中でたくさんの騒音が鳴っていました。

2月19日のことで、翌日は戴冠式の日でした。

誰もが幸せで、興奮していました。

マイルズとエドワードはたくさんの群衆の中において、二人はすぐにお互いを見失いました。

二人はもはや、お互いを見つけることができませんでした。

かわいそうなエドワードは寒く、空腹で、独りぼっちでした。

一方、トムは王宮や美しく新しい服、上質な食べ物などを楽しみ始めていました。

誰もがトムにお辞儀をし、トムの話に耳を傾けるので、トムはこれが気に入りました。

宮殿での最初の何日間かは、トムは自分の母親や姉たち、エドワードについて考えていました。

しかし日が経つにつれて、トムは彼らについてほとんど忘れてしまいました、なぜならトムはこのすてきな新しい生活が気に入ったからです。

トムは楽しくて、快適でした。

翌朝は2月20日、戴冠式の日でした。

トムは、「今日、俺はイングランド王になるんだ！俺はパレードで、立派な新しい服や宝石を身に着けるんだ。ああ、こいつは素晴らしいや！」と思いました。

間もなくすると、トム・キャンティは立派に着飾り、王室のパレードで背の高い馬に乗っていました。

トムの後ろには、晴れ着で着飾った貴族や裕福な紳士たちがいました。

音楽が流れており、ロンドンの路上には何千人もの幸福な人々がいました。

「新しいイングランド王、万歳！」と彼らは叫びました。

トムをほほ笑んで、しばしば人々に新しい硬貨を投げました。

トムは偉い人になった気分でした。

突然、トムは大群衆の中に自分の母親を見ました。

母親はトムの足に触れて、「ああ、私のかわいい子どもよ！」と叫びました。

一人の兵士が母親を押しやりました。

トムは母親を見て、「女よ、俺はあなたを知りません！」と言いました。

トムの母親はとても悲しくなり、群衆の中に消えて行きました。

しばらくするとトムは、「ああ、俺は何てことを言ったのだ！」と思いました。

トムはつらい気持ちになり、突然、惨めになりました。

王室のパレードは、ロンドンの路上を通過してウェストミンスター寺院へと続きました。

教会は人々であふれかえっており、その素晴らしい日のために美しく装飾されていました。

ついに、カンタベリー大司教がイングランド王冠を手に取り、トムの頭上に王冠を掲げました。

誰もが静まり返っていました。

突然、靴を履いておらず、古びて汚れた服を着た一人の若い少年が教会の中へ駆け込んで来ました。

「お前は国王ではない！私が国王だ！」と少年は叫びました。

皆が驚き、互いの顔を見合わせました。

「何が起きているんだ？」と一人の紳士が尋ねました。

「あのこじきは誰なの？ 何が欲しいのかしらね？」と一人の貴婦人が尋ねました。

ハートフォード卿が慌てて、「兵士たちよ、この少年を止めよ！」と言いました。

エドワードとトムは少しの間、互いの顔を見つめました。

「違う」とトムは言いました。

「その少年に触れてはいけません！ 彼こそが本当の国王なんです！」

皆が混乱しました。

ハートフォード卿は二人の少年を見て、「二人の顔を見よ。彼らはうり二つだ！ だがどちらがわれわれの国王なのだろうか？」

「彼が本当の国王です！」とトムはエドワードにほほ笑みながら言いました。

「国璽について彼に尋ねてみるといいですよ」

「なるほど」とハートフォード卿は言いました。

「本物の国王だけがこの質問に答えることができる。国璽はどこにありますか？」

エドワードはすぐに、「私の部屋にある、古いイタリア製のよろいかぶと一式の中を見るといい。国璽はそこにある」と言いました。

ハートフォード卿は王宮の国璽を探すため、ジョン卿を遣わしました。

ジョン卿は戻って来ると、「国璽を見つけました。こちらです！ そのこじきは正しい。彼こそが国王です！」と言いました。

カンタベリー大司教は、イングランド王冠をエドワードの幼い頭の上に乗せました。

教会にいた誰もが立ち上がり、「エドワード王万歳！」と歓声を上げました。

トムは国璽を見て、「俺はそれをナッツを砕くのに使っていました。それが国璽だとは知りませんでした！」と言いました。

「彼はナッツを砕くのにイングランドの国璽を使っていた！」とハートフォード卿は大きな声で言いました。

「何と愉快的なことよ！」

貴族たちは皆、大笑いしました。

その偉大な儀式は終わり、エドワードはエドワード6世となりました。

翌日、マイルズは自分の友達であるエドワード6世に会いに行きました。

若い王はマイルズ侯に会えてうれしく、マイルズは彼に、自分の弟であるヒューとの問題についてもっと話をしました。

「マイルズ侯、お前は親切で、私を助けてくれた」と若い王は言いました。

「今度は私がお前を助けよう。ヘンドンハウスはまたお前のものだから、そこに戻ることができる。お前の弟のヒューはお前に全てのものを返すだろう」

「ありがとうございます、エドワード国王！」とマイルズ侯は幸せそうに言いました。

エドワード6世はとても有能で優しい国王でした、なぜならこの数日間、彼はこじきだったからです。

エドワード6世は自分の民を知り、彼らの問題を理解しました。

トム・キャンティは国王の親友となり、ウェストミンスター宮殿で暮らしました。

エドワード6世はトムの母親と姉たちに、田園地帯にあるすてきな家を与えました。

そして誰ももう二度とジョン・キャンティを見ませんでした。

エドワード 6 世は、たった 16 歳のときに死にました。

トムはとても悲しく、ウェストミンスター宮殿を去りました。

トムは自分の母親と姉たちと一緒に暮らすため、田園地帯に行きました。

誰もが長い間若い王のことを覚えていました、なぜなら、彼は自分の全ての民—富める者も貧しい者も全ての民を愛したからです。